

玉名市立歴史博物館 令和7年度企画展
「戦後80年 たまな・くまもとの戦争遺産～次世代への継承」
講演会資料
□日時：令和7（2025）年8月10日13：35～
□場所：玉名市民会館マルチホール

「進駐軍の見た くまもと」

くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク
代表 高谷 和生

1 はじめに

(1) 海兵隊の熊本への進駐

- 九州へは9月3日鹿屋地区に、10日には米国第五海兵軍団が佐世保にまずは進み、ここに本部を置き、九州各県及び山口県主要都市に進駐した。
- 熊本には主軸である海兵第二師団（師団長ハント少将）隷下の第八連隊（連隊長マックファーランド大佐）が、10月5日から12日までに進駐を完了した。主力は熊本市北区八景水谷の旧陸軍熊本幼年学校跡の米軍名「キャンプウッド」であり、他にも旧歩兵第十三聯隊他の大江地区旧陸軍施設、熊本城周辺のグリーン・レッド地区等にも駐留した。
- 駐留部隊は数回交代しながらも、サンフランシスコ昭和31年7月6日から撤収を開始したものの、10月14日キャンプウッドが返還されるまで、その進駐は11年間続いた。

(2) 海兵隊フィルムとは

- 1995年、羽仁進氏が主催する市民団体「平和博物館を創る会」では、戦後に米国海兵隊が撮影した長崎被爆惨劇の映像を入手しようと「10フィート運動」を全国に広げ、米国国立公文書館より16ミリカラーフィルム「16,661フィート（3.25km）・約五時間・1121カット」の画像を入手した。
- 非常に貴重なフィルムで、音声は付いておらず、その経緯からして米軍側ロケーションレポート（作戦用務）は未調査であった。

(3) 撮影部隊の概要

- この映像の撮影部隊は、米海兵隊第二海兵師団ノーマン・ハッチ少佐指揮下の複数映像班（2D MAR DIV MOVIE SELECTION）で、同時にスチール写真も公式に撮影していた。
- 撮影期日は1945年9月23日～1月10日で、部隊は長崎港に上陸後、市内各所で原爆被災後の状況を撮影しつつ、長崎近辺（大村・島原他）へも出向いている。その後国鉄を利用し大牟田を経て、熊本へ到着している。
- 映像では各ショット撮影前には既存様式のクレジットボードが写され、そこには撮影者、日付（date time）、撮影内容及び場所、最下段には撮影班「2D MAR DIV」の基本情報が記載されていた。

2 県内撮影映像・写真の概要

(1) 吉村陽夫氏16ミリ映像資料

- 映像は、長崎ケーブルメディア内番組で放映された吉村陽夫氏資料で、長崎原爆投下後で最も早い45日目の被爆初カラーフィルムである。それに付随し収録時間は短いですが、敗戦後の熊本を記録した貴重な16ミリカラー映像である。
- 映像内容は長崎港での輸送船AP34「フランクリン・ベル」の入港様子、大牟田での三井染料工業所「三井染料軍楽隊」歓迎演奏も含め映像時間は7分31秒、うち熊本関係は5分21秒である。
- 県内内訳は健軍飛行場（飛龍横全景・完全武装飛龍機首部・緑十字マーク百式輸送機・金峰山を背景とした第一七〇戦隊列機他）計116秒、三菱熊本航空機製作所（飯田山を背景とした工場南側長尺建物・龍田山を背景とした北側建物群）計67秒、菊池恵楓園（家族舎縁側での少年集合、恵楓学園・公会堂・事務所棟と看板・米兵と歓談する宮崎松記園長他）計130秒である。

(2) 昭和館16ミリ映像資料

- この映像は1995年頃米国国立公文書館より館が独自に入手したもので、ウェブ等でも「熊本の市街地の様子」として紹介されている。
- 映像内容は長崎港の様子、大牟田駅ホーム様子や車窓から見える三井倶楽部展望所と大牟田市役所を含め映像時間は6分39秒、うち熊本関係は4分43秒である。
- 内訳は、熊本市街地被災様子・熊本市公会堂他計115秒、熊本駅前・熊本駅までの車窓風景の計58秒、菊池恵楓園（独身舎全景・西側通り・独身舎縁側女性・縁側に集合する少女達・畑仕事様子）117秒である。また、本映像は、戦略爆撃団調査内容の映像公開「戦後日本の原風景Vol. 八 本土最前線・九州」の映像の一部でもある。

(3) 熊本日日新聞社所蔵野田衛氏白黒写真

- 熊本市出身のジャーナリストである野田衛氏から1985（昭和60）年に、約240点の写真寄贈を受けたもので、これらは「熊日情報ライブラリー」に所蔵されている。資料入手先は「アナコシア海軍基地海兵隊資料館」とされる。
- 一部は熊日紙上の特集「米軍記録 占領下の熊本 克明に」での紹介（昭和60年7月12日～8月15日・全29回）、展示会「終戦四〇年 熊本展」（1985年8月13日～一九日・鶴屋百貨店ホール）で公開された。ただその後はまとまった公開はなされておらず、全資料のデータ化もなされていない。海兵隊による現地撮影後は、本国帰国後で整理され、台紙に紙焼写真を貼り付け、撮影概要を記した小さなタイプ打ち紙を裏面に貼付けている。
- 内訳は、菊池飛行場8枚、菊池恵楓園3枚、健軍（熊本）飛行場11枚、三菱重工業熊本航空機製作所4枚、三角港爆弾等投棄6枚・米兵阿蘇登山12枚・天使園5・南熊本の航空機工場4枚、熊本市内のゴミ捨て場3枚他の「計87枚」である。

(4) 長崎平和推進協会白黒写真資料

- この写真の大部分は、長崎原爆投下後で撮影された白黒写真群である。長崎原爆資料調査の過程で、米国立公文書館に所蔵されている「Nagasaki」銘と記載がなされている資料群約4,000点である。
- 専用パンチカード方式台紙に該当写真を貼り付け、台紙に直接タイプ打ちして収納している。先述の「アナコシア海軍基地海兵隊資料館」様式とは異なる保存形式で、解説文章も異なるものが多い。台紙には通し番号例「137337」等が手書きされ、番号例として「127-GW-1542」等が記載されており、これは米国立公文書館独自の分類とされる。具体例として「RG127-GW, Photographs of World War II and Post World War II Marine Corps Activities, ca.1939-58」等の記載である。
- 内訳は、天草海軍航空隊・富岡水尻砲台他21枚、菊池飛行場26枚、菊池恵楓園10枚、健軍（熊本）飛行場38枚、三菱重工業熊本航空機製作所8枚、三角港爆弾等投棄・米兵阿蘇登山・天使園・熊本市内各所他99枚の「計202枚」である。先述の野田衛氏資料と重複するものもあるが、新発見写真は「179枚」である。また本写真群の撮影された期日は、45（昭和二〇）年10月14日～46年3月18日までである。

(5) 衣川太一氏カラーズライド写真

- 2023年岩波新書より佐藤洋一・衣川太一著『占領期 カラー写真を読む ～オキュパイト・ジャパンの色』が出版され、陸軍隈庄飛行場での戦後接收カラーズライド写真が確認された。
- 公式なものではなく、同撮影班部隊員ヘンリー・H・ソウレン氏撮影のプライベートスライド写真である。飛龍天蓋部コクピットから、身を乗り出す「ソーレン」氏とされる人物に象徴される記念写真である。
- 公開されたスライド写真には、飛龍機の垂直尾翼に「229」番が描かれたり、飛龍列機で5機がほぼ一直線に並び、背景には雁回山系の山裾が見える隈庄飛行場南側部5枚、三菱重工業熊本航空機製作所1枚、熊本市内の庶民生活4枚の計9枚である。

3 まとめ

これまで確認された熊本関係資料は、公式資料は16ミリカラー映像では吉村陽夫氏映像と昭和館映像の2本である。白黒写真でも2種で、熊本日日新聞社「熊日情報ライブラリー」所蔵の野田衛氏白黒写真は 調査入手先がアナコシア海軍基地海兵隊資料館とされることから、米国立国会図書館資料（長崎平和推進協会所蔵資料）に先行するものと想定される。また、ソウレン氏撮影のプライベートカラーズライド写真もそれらの一群を成すものである。いずれにしても「戦後熊本の敗戦状況」を記録した貴重なオキュバイド資料群である。

当初の生々しい長崎被爆写真等からはじまり、当地熊本の飛行場や軍施設の接收・武器処理のリアルな記録へと続く。ただ撮影者も興味関心は次第に女学校や孤児院の慰問などへと移行し、「自由解放軍」をアピールする主題へと変る。あくまでも撮影者である米兵の視点は、急激に復興をとげてゆく熊本の市井の人々、庶民生活へ移るのである。そこに「占領下の熊本」が克明に描かれる。

一方、米軍側ロケーションレポート（作戦用務）が未調査であることから即断はできないが、長崎平和推進協会資料にある「天草海軍航空隊・富岡水尻砲台等」の天草地方接收写真群は、新発見資料である。さらに、プライベート写真では写されているが、公的資料としては隈庄飛行場接收写真は確認できていない。今後はまだまだ眠っていると思われる米国立公文書館での「KUMAMOTO」記銘資料の総合的な調査が待たれる。

そして、県特徴史料として菊池恵楓園撮影資料の調査も急務である。本件撮影目的は、進駐してきた米兵や家族等への衛生状況確認の視野であるであろう。ただ、全国のハンセン病回復者施設では、米軍沖繩進行作戦の一連の資料として位置づけられる沖繩愛楽園以外では未だ確認されていない。こちらに関しても早急な全国調査が待たれる。